

## 教育課程編成委員会 第2回議事録

日時：2017年10月11日(水) 18時30分～19時40分

場所：東京 YMCA 医療福祉専門学校 15 教室

出席者： 三沢幸史氏 望月太敦氏 小檜山修平氏  
八尾 勝 倉持有希子 中浦俊一郎  
列席者： 品川智則 中村由美 村上 剛 林 恵子  
欠席者： 白井幸久氏

### I. 聖書日課 使徒言行録9章17-19節 村上

聖書およびその解説を朗読。

引き続き、ブランディングについて次の通り説明があった。

日本全国のYMCAが一体となって新しいYMCAのブランディングに取り組み、この10月にスタートした。新しいマークはこれまでのYMCAの歴史を引き継ぎ、そしてこれから未来に向けて飛び立っていく鳥がイメージされている。様々な事業の展開をそれぞれのYMCAが独自に行ってきたため、「YMCA」という団体がわかりにくい状態であった。「ひとりがよくなれば、みんながよくなる」を実現してゆきたい。

### II. 議事

#### 1. 開会の挨拶

八尾校長より、ブランディングと介護福祉分野、作業療法分野についての状況説明があった。

ブランディングは4年前に、全国のYMCA会員、職員1万人を対象に行ったアンケートから始まり、時間をかけて練ってきたものの集大成である。先日行われた全国のYMCA専門学校担当者会でも、上が決めたから従う、のではなく、私もその考え方に賛成なので協力する、というYMCAらしい進め方で全国のYMCA専門学校が可能な限り足並みをそろえることが合意された。

厚生労働省の長期的方針として資格統合の方針がある。また、2019年4月から専門職大学の設立ができるようになった。学生は何をどの時期に学ぶのか、教育課程の編成において企業とどのように連携するのか等、揺れ動いている現状である。将来的に教育課程を大きく変更する可能性がある。

介護福祉分野では2019年4月スタートを目標に新しいカリキュラム検討が進められている。現在の教育課程よりやや高いレベルが求められることになりそうである。

作業療法分野でも、厚生労働省においてカリキュラムの意見集約が行われている。実習の方法を中心に、より地域、高齢者を視野に入れた厚みのある内容が話されている

ようである。

## 2. 部会

今回の委員会では前回 8/22 に委員の皆様からいただいたご意見をもとに各学科で話し合いを進めてほしい旨の説明があり、部会に分かれ 19 時 25 分まで介護福祉科と作業療法学科それぞれで話し合いを行った。

## 3. 部会報告

(それぞれの部会の記録は別紙の通りである。より詳細が記録されている。)

### 1) 作業療法学科 中浦学科長より部会の様子の要約が以下の通り報告された。

- ・共生社会を視野に学生達を育てていきたい。
- ・ボランティアを「しくみ」として位置付け、学生達に積極的に参加してもらい、その反応を共有したい。ボランティア活動を多くの学生が実際に行うようにしてゆく。
- ・「見える化」から「気づき化」へシフトし、しっかりアンテナを張って学生達の反応を受けとめ、学びを引き出していきたい。
- ・東京都作業療法士会の企画する事業に学生達が参加できるようにして、一緒に盛り上げることで都士会との連携の心理的ハードルを下げていきたい。
- ・実習の「評定3」は「模倣ができる」とした。自分で考える力がつかないのでは、という懸念もあるがまずは、武器を持たせることで自信を持たせたい。この学校の方針は、バイザー会議で発表するのではなく、その前に各施設にお知らせし、バイザー会議では各施設の意見をお伺いできるように改善する。
- ・学校と実習先での学生達の態度の違いをどうするかについては、自由度をもって学生の良い面を引き出していきたいと考えている。

### 2) 介護福祉科 倉持学科長より部会の様子の要約が以下の通り報告された。

- ・ボランティアを明確に教育目標の中に位置づけた。自主性が無い学生に対し、教員が働きかけてボランティアに参加した学生達には効果があった。望月委員から、自分で考えられることの重要性について発言があったが、我々も学生達からボランティアを通してそれを引き出せることを期待している。
- ・介護のカリキュラムは高齢者のことが中心になっているが、今後、「障害」に関する視点をさらに意識する必要性を感じている。
- ・国家試験対策はもちろん重要だが、国家試験の合格がゴールではなく、それはあくまで介護福祉士として現場で活躍できる人材を育てる上での中間評価であることを意識しながら国試対策をすすめていきたい。このことは、学生に向けても説明していかなければならない。

4. 校長より閉会の挨拶

本日の委員会をもって今年度の教育課程編成委員会は終了する。後期の学事暦で主だった行事は別紙の通りであるが、ご出席いただける行事があったら事前に連絡を欲しい。

委員の皆さまへの感謝を伝え閉会となった。

以上

## 2017年度 第2回教育課程編成委員会・部会（介護福祉科部会）記録

出席者：望月太敦氏 倉持有希子 品川智則

欠席者：白井幸久氏

進行：倉持有紀子

記録：品川智則

### 1. 本日の意見交換をテーマについて

倉持学科長から説明がなされた。

#### 1) はじめに

本日は、国家試験対策やボランティア活動などについて、今後どのようにしていけば良いかや新たな課題、あらためて授業で学生に伝える内容などについて話し合いをおこなう。

#### 2) 国家試験について

国試対策については、1年生のときから、順序だてて実施していくように実施している。

さまざまな取り組みが今後必要になってくると思う。先日、出席した、学会で各養成校が様々な国試対策として実施している取り組みについて話を聞くことができた。そのなかで、どの学校も非常に国試対策に力をいれていることがわかった。具体的には、長文読解の練習や国語力身につけるための工夫をしていることがわかった。文章の読み方トレーニングなどを段階的に行っていることがわかった。

私たちの学校としては、国試対策を具体的に実施していくなかで、国試対策といった伝え方だけではなく、国試を受ける意義目的などを授業の中に盛り込みながら学生に伝えていきたい。また、グループ勉強を取り入れることで、モチベーションを維持していけるようにしている。また、短期合宿をすることなどを通して、学習を進めている。

学校としての過密スケジュールになっている中で、どのように働きかけていくかが重要となっている。学生自身が国試の勉強の意義を理解していけるようにかかわりをもっていきたい。

#### 3) ボランティアについて

実際にボランティアを行っていくうえでどのようなところに位置付けていくかを明確にしていく。そのうえで、学生自身の自主性にどのように働きかけていくことを大切にしていきたい。現在実施している内容としては、学習支援演習などの授業などを通して学生に伝えるような努力をしている。また、ボランティア活動の具体的な報告（被災地ボランティアや施設が実施している取り組みなど）をし、ボランティアの入り口を大きくしていくなどはたらきかけをしている。直接すぐに学生自身に影響を与えているわけではないが、学生自身のマインドを育てていくうえで重要なものとして位置付けている。

今後も学生の学校生活におけるバランスをとりながら継続していく。

### 2. 望月氏からの質問、意見

#### 1) 国試対策について

国家試験に受かるための取り組みも大切だが、受かるための勉強だけではない。介護福祉士と

してのスタートラインに立っているということを伝えていくことの大切であると思う。国家試験を受験して突破してはじめて資格をもって働くことができるんだということに代わっていくのではないか

## 2) ボランティア活動について

ボランティアの自主性をおこすための働きかけから実施していくことはとても大切だと思う。就職して仕事するようになったとき、自己研鑽のための研修や生涯学習などへの参加は自分で課題を見つけることから始まる。そういう意味でも、自主性が育つように働きかけることは大切である。また、このことは、地域で働いていくことにつながってくる。自主性が育つことで利用者のニーズや地域の資源を掘り起こす力につながるのではないか。ボランティアがすべてではないと思うが、このような取り組みは今後も実施して欲しい。

## 3) その他の意見

介護福祉士が対象とする利用者の方たちは高齢者から障害児者というように幅広い。例えば障害児者について、カリキュラム上では多くの時間はとれないが、今後必要になってくるのではないか。障害児の方々と高齢者とは、自立支援の考え方や生活支援のとらえ方が違ってくこともある。例えば、高齢者は、加齢や疾病などの影響により、これまでの生活で獲得してきた機能が失われいていくなかでの支援となる。一方、障害児者は、そもそも発達の段階で、獲得していない機能を、生活支援としてどのように機能を活かした働きかけをすることが求められる。このように対象者が広がることで、そもそもの養成課程のなかで、学ぶことが必要なのではないか。

障害児者を対象とした仕事をしていく中で、「人と向き合う」というのが一番の基本であるということ学んだ。その人のことを理解したい、向き合いたいという気持ちがあるからこそ、その人の障害やそのほかのことを知るための勉強をすることにつながっていくのだと思う。

## 4. 倉持学科長から

これらの内容をすべてカリキュラムの中で実施するには厳しい現状がある。カリキュラムの内容が高齢者を対象としたものになっていることが多い。障害についての理解のための十分な理解をしているかという点、十分ではないのが現状である。

発達という視点で学ぶ機会はあるが、学習する時間数は少ない。高齢者のことと障害者のことをバランスよく勉強していくことが必要である。

高齢者には通用するコミュニケーションがそのまま、障害者に通用するかというそうわけではないので、学校としても障害者への理解を深める機会が必要と考えている。

以上

## 2017年度 第2回教育課程編成委員会・部会（作業療法学科部会）記録

出席者：三沢幸史氏 小檜山修平氏 中浦俊一郎 村上剛 中村由美

進行：中浦俊一郎

記録：中村由美

### 1. 本日の意見交換をテーマについて

中浦学科長から説明がなされた。

#### 1) はじめに

本日は、前回の会議を受けて、毎年変わる学生の様子に対応すべく、来年度の学生生活の中にボランティア活動を制度化したり、国家試験に対する対策を変えるなどの工夫をしたいと思っている。ご意見をお伺いしたい。

#### 2) ボランティアについて

ボランティア活動参加募集してもなかなか集まらず、声かけして集めている状況。

習慣化、義務化し、気づきになっていく仕組み作りを進めている。

来年度より縦割り班を中心に進めていく。発表、共有の場を作っていく。

都士会の事業計画の中で、評価されない中での活動参加を通してOTと触れ合う。OTのハードル、都士会へのハードルを下げる。都市会への入会につながる。また、実習へ向うに当たっての体勢作りにもなる。

先日、学会でもボランティア活動について参考となる発表があった。

#### 3) 国家試験について

既卒者対象に月2回登校するよう枠組みを作った。自分で気づいてもらえる場となることを期待。

### 2. 質疑応答・ディスカッション

主に以下の3テーマについてディスカッションがなされた。

#### 1) ボランティアについて

三沢氏：今まではどんなスタイルで行っていたのか？

中浦：掲示版に掲示し、それを見て申し込んでもらうといったスタイル。

三沢氏：先輩からの継承などはなかったか？

中浦：石巻ボランティアは発表の場が設けてあり、受け継がれてきた。

小檜山氏：縦割り版グループメンバーと一緒に参加するのか？

中浦：縦割り版をゼミ化して進めていく事も考えている。最初にインタビューで得意分野や興味などで振り分けることも考えている。

小檜山氏：共通点があるとよいですね。

中浦 : 不安大きい下級生の不安を和らげる役割も担う。これまでの縦割り班はやらされている感が強くうまく機能していなかった。

小檜山氏 : 今までではどんな内容だったのか？

中浦 : レクやゲーム、茶話会が多かった。そのため、今年度はテーマを決めてやってきた。これからはボランティア活動を通し、地域の人と交流を持てるとよい。足りないところを補えるとよいと思う。

三沢氏 : よいのではないか。仕事に入ると(OTになると)診療報酬など枠が決められてしまい、その中で限られたことをやっている感がある。OTの本当の良さを知ってもらいたい。枠組みのないところで役に立つという発想は良い。本来は制度を超えてやれることはあるはず。広げるにはボランティア活動は良い。

小檜山氏 : 私たちは制度の中で凝り固まっているから。

三沢氏 : 自分がやっていたボランティアは先輩から代々受け継がれたものだった。義務でもよい。その中で学ぶことあるはず。

村上 : 病院でのボランティアでとくに学生に向いている内容はどのようなものがあるか？

三沢氏 : 話し相手、傾聴という役割が一番多い。専門知識等を必要としない外来の案内等の需要も時にある。

中浦 : 実際には祭りやイベント時の手伝いの依頼の数は多い。

小檜山氏 : K病院では家族ボランティアというものがある。取り組む枠があると入りやすい。枠があれば参加しやすい。義務と思う人もいるかもしれないが、ボランティアの経験は実習に役立つと思われる。

中浦 : 地域での介護予防事業においても「OTは何してくれる人なの？」とよく知られていない。学生が外に出ていく事でOTを知ってもらう機会になるとよい。最近ではジョブコーチのような役割を担い企業へOTが進出している。経験を活かせる場である。

## 2) 実習評定について

三沢氏 : 実習の「評定3」の定義についてはその後どうなっているか？

中浦 : 今年度から周知させていきたいと考えている。

三沢氏 : 実習依頼時にお知らせ頂きたい。マイナスの意見もあるかもしれないが、SV会議の時に急に言われても消化できない。またSV会議の参加者がどういう位置の人か分からない。あらかじめ言っておいた方がよいと思う。

中浦 : 確かに若い卒業生がSV会議に参加することもあるので、事前周知は必要と考える。

三沢氏 : 早めの打診が良いと思う。その方が会議の場で参加者の意見をもらえるのでは。

中浦 : 確かに準備があるのとないのでは違う。浸透は難しいと感じているが言い続けていかないといけない。今後クリニカルクラークシップへの移行期となるかもしれない。今後の課題となる。前々に伝えていく事を徹底していきたい。

## 3) 学生の実習前準備について

村上 : 実習を最後まで続けられなくなってしまう学生がいる。現場サイドから見て学校での

指導などで必要なことなどの助言を頂きたい。

小檜山氏：受ける側の施設、作業療法士の問題もあるような気がする。学生が求めているものと受ける側の求めているもののギャップがあるのではないか。やはり学校側の方針を実習先に理解してもらう必要がある。パワーバランスの不均衡でやりにくくなることもある。

三沢氏：この学生は大丈夫と以为っていても、学校での評価と現場での評価違うことが多いのではないか。

小檜山氏：現場では環境が変わると学校のようにうまくいなくなることもある。

三沢氏：勉強ができる子が現場で出来るとは限らない。コミュニケーションをうまくとりながらうまく行動していく事は難しい。逆に学校では劣等生の学生が現場では上手くやりくりできる場合もある。実習指導者とのミスマッチもある。実習の評価よくなくても現場に出てから活躍できる子もいる。

中浦：自分がやるべきことの枠が決まっている学校環境と、自由度の高い現場とでは大きな違いがある。現場に出ると臨機応変に動けなくなってしまう。学校においても自由な発想を引き出せるようになれ様な関わりが必要。何でも与えられる環境でないことを学校でも教育していく必要がある。

小檜山氏：現場での模倣を通して引き出しを多くする取り組みが必要ではなか。

以上